

2026 年 1 月 1 日

中原キリスト教会  
元日礼拝  
マタイ福音書 7:7-11  
「何を願うか」

山口 希生

みなさま、新年おめでとうございます。毎年恒例になりましたが、元日礼拝は今年の年間主題聖句を取り上げてお話しします。このマタイ福音書 7 章 7 節は昨年の講解説教で取り上げたばかりの箇所なので記憶に新しい箇所でもあります。年初にあたって改めてこのみことばをよく考えてみたいと思います。

お正月といえば初詣で、多くの日本の方々は二年参りに赴いて神社仏閣で年越しを迎える方も多いと思います。初詣で何をするかと言えば願掛けであり、新しい年を迎えるにあたってお賽銭をしてお願いをするというのが多くの日本の方の行動パターンだと言えるでしょう。お願いする内容は様々で、受験生の方は合格祈願、サラリーマンの方は商売繁盛、若いカップルは子宝を授かることなど、いろいろでしょう。普段は宗教に無関心な日本人が急に信心深くなるように見えますが、日本人が神仏に祈るのは、このように何かをお願いするときだと言えるでしょう。

かくいうキリスト教の場合も、祈りとお願いには深い関係があるように思います。「求めよ、さらば与えられん」というみことばが聖書の中でも最も人気があるみことばの一つであるというのもその証拠と言えるかもしれません。ただ、このようなシンプルで力強い言葉は誤解を招きやすいものでもあります。「信じる者は救われる」という、これまたよく言われる言葉もそうですが、こういう分かりやすいことばほど、よくよく意味を考える必要があります。というのも、神様に願えば何でもかなえられると言われても、そんなはずはないということは子供でも分かるわけです。そこで、何をどう願うべきなのか、ということを聖書の他の箇所を参照しながら考えてみましょう。それは昨年の説教でも取り上げたヤコブの手紙です。この手紙はイエスの実の兄弟であるヤコブが書いたものと言われていますが、その内容はさすが兄弟というべきか、イエスの教えと非常に近いのです。そのヤコブが願うこと、求めることについて何と言っているかを見てみましょう。ヤコブ書 1 章 5 節から 8 節です。

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようで

す。そういう人は、主から何かをいただけたらと思っただけでいいです。そういうのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いています。

このように、疑わずに信じて願えば与えられる、ということをヤコブは述べています。しかしヤコブはほかのところで願っても与えられないということも話しています。そこを見てください。4章1節から3節です。

何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょうか。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。願っても受け入れられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

このように、自分の快樂のためにというような悪い動機で神に願っても、それは叶えられることはないとはっきり語っています。先ほどのヤコブの教えと一緒に考えるならば、神は私たちにとって本当に良いこと、必要なことを願うならば与えてくださるけれど、私たちの目先の快樂のための願いは聞いてくださらないということです。これは当たり前のことですよね。自分のことで言うのも恥ずかしいのですが、私は小学生に入るか入らないかの頃に、おじいちゃんとおばあちゃんからお正月のプレゼントをもらったことがありました。私はその時、ゲームが欲しくてそれを願っていたのですが、おじいちゃんとおばあちゃんがくれたのは勉強道具でした。私はそれを貰った時に泣き出して、「こんなのいらない」と駄々をこねました。まあ、今から思えばなんてことをしたんだろうと思うわけですが、おじいちゃんとおばあちゃんは私の将来にとって一番良いものを用意してくれていたのですが、私は目先の楽しみで頭が一杯だったわけです。そして、大人になった私たちと神様との関係も、どこか子供の頃の私と祖父母との関係と似たところがあるのかもしれない。

さすがに大人になった私たちは神様に「あのゲームが欲しい、買って」と祈り求めることはないでしょうが、私たちが神に願うものは、後になって少し距離を置いて俯瞰してみると、「なぜ私はあんなことを願ったのだろうか」と思うようなことが少なくないのではないでしょうか。あるいは、自分が本当にしたいことを自分ではわかっていないということもあります。いきなりなんだかエリートっぽい話になって恐縮ですが、私はサラリーマンだった時に強く願っていたことがありました。それは当時勤務していた銀行から海外の大学院に留学させてもらうことでした。私の父もかつてアメリカの一流大学に社内留学生として派遣されたことがあったので、なんとなく留学へのあこがれがあったのです。私は当時そのためにいろいろと努力し、英語力を上げたり資格を取ったりしました。

しかし、いざ来年チャレンジしようとしていた時に、バブル崩壊の影響を受けていた銀行は突然留学制度を中止しました。私は目標を見失ってなんだか呆然としてしまいました。仲の良かった先輩から、国内の大学院でもいいじゃないかと言われ、当時渋谷支店に勤務していたこともあり、青山学院の夜間の社会人向けMBAコースに入学しましたが、それはやはり海外留学の代わりにはなりませんでした。

しかし、今から振り返ると、たとえアメリカの一流のMBAに入学できたとしても、自分は全然幸せではなかっただろうな、と思います。今なら分かりますが、MBAで学ぶような内容は、私が本当に学びたいことではなかったからです。またMBAに来るような人たちは非常に上昇志向の強い人たちばかりなので、せっかく海外生活を経験できたとしても、そういう人たちとの競争に明け暮れる二年間というのもあまり幸せではなかっただろうと思います。それに対して、神学の勉強のためにイギリスに留学した七年間は本当に楽しく、学ぶことも自分が心から学びたい内容でした。しかし、サラリーマンをしていた頃の自分は、自分が本当に勉強したいのが聖書学だなどとは一ミリも思っていませんでした。そんな面白い学問があることなど全然知らなかったからです。

しかし神様はそのことをご存じでした。「アメリカのビジネススクールに留学したい」という私の願いは叶いませんでしたが、私に本当の知恵を与えてくれる留学の道は神様がちゃんと用意してくださっていたのです。また、ビジネススクールに行くために英語を勉強したり論文を書いたりしたことは決して無駄になりませんでした。また、金融機関で働いていたおかげで、結構なお給料をいただいていたから、留学のための軍資金を蓄えることができました。私は30代の半ばで留学しましたが、20代の世間のことが何もわかっていなかった時よりも、ある程度の社会経験を積んだ後のほうが神学の学びにもプラスの影響があったように思います。

と、なんだか私の証しになってしまいましたが、この話から「神は願い求めるものを与えてくださる」ということについての一つのイメージができるのではないのでしょうか。神は確かに私たちの願うものを与えてくださいます。それは当初自分が願っていたものとは違うものかもしれませんが、しかしきっとそれは自分すら知らなかった私たちの本当の願いなのです。神様は良い方ですから、私たちに本当に良い物を与えてくださるでしょう。そのことを信じて今年も歩んで参りましょう。お祈りします。